

ねぎの生育状況をふりかえって

1 異常気象とねぎの病害発生

本年は6～7月にかけて記録的な大雨と梅雨明けの遅れ、8～9月にかけての高温及び局所的な豪雨が農作物に影響を与えました。(図1)

「ねぎ」は特に多湿に弱い作物でこの条件で発生しやすい「疫病」が多発しました。ほ場での防除及び除草対策ができなかったことも「ねぎ」の生育を抑制してしまつた原因と考えられます。

一転、8月に入ると太平洋高気圧の勢力が強くなり、高温状態が続き「軟腐病」が多発しました。ほ場によっては、病害の影響により「ねぎ」が消失して生育が極端に不揃いな状況となりました。

2 病害の多発ほ場の共通点

- ・滞水時間が長い 畑の低い場所、ねぎ植溝内など↓湿害も併発して根が弱体化
- ・施肥量が多いほ場 軟弱な生育状態
- ・畝間の管理作業 畝間に伸長した根が切れて高温と多湿が重なる

3 各病害の発生条件

・適期に防除ができなかった 畑に入れず防除できるタイミングが無い、多雨により薬剤そのものが流亡する
※対策を実施していてもそれを上回る降水量で排水しきれない畑もありました。

(1) 疫病(糸状菌・生育適温 28～30℃)

- ・梅雨から初秋にかけて、特に夏期に降雨が多いと多発。集中豪雨等で激発する。
- ・前作の多発ほ場で連作する
- ・低湿地や排水不良の畑
- ・窒素肥料を多投し軟弱な生育のもの

(2) 軟腐病(細菌・増殖適温 30～35℃)

- ・初夏から初秋にかけて発生、盛夏に土壌湿度が高いと発生しやすい。
- ・長期の降雨、平年より気温が高く畑が数日間浸水すると激発する。
- ・連作ほ場
- ・定植期が春で覆土が深い夏どり栽培は、定植期が夏で夏期の覆土が浅い秋冬どり栽培より発病しやすく、発病程度が高い。

4 次年度に向けて

全国的に極端な気象条件が続き、管理が難しい状況でしたが基本的な対策を今後も心がけてください。病害発生ほ場では、罹病残渣の適正な処理、輪作・緑肥等による土づくり・排水対策や施肥量の見直しの他、各病害に対する早めの予防防除や薬剤のローテーションをしましょう。

5 その他病害虫

- ・黒腐菌核病
ねぎの難防除病害で、発生適温が15～20℃で低温を好みます。
上記病害の対策の他、酸性土壌の矯正や土寄せ前の予防的防除等の対策をしましょう。
- ・ネギネクロバネキノコバエ
現時点(11月)で成虫の発生はほとんど見られませんが、まったくいなくなつたわけではありません。今後も注意が必要な重要害虫の一つですので、「防除マニュアル」を参考に防除をするとともに「ねぎ残渣」を適正に処分し発生を防止しましょう。



図2 疫病発生の様子(7月)



図3 軟腐病に罹病したほ場の様子(8月)

図1 気象経過

